

大東敬明 提出 学位申請論文（課程博士）

『寺院儀礼における中臣祓―東大寺修二会の神道史学的研究―』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、大きく序章、第一章「中臣祓の研究史」、第二章「東大寺修二会と中臣祓」、第三章「東大寺堂衆と真言神道」、第四章「春日社における祭具と神祇言説」、終章から構成されている。

序章には、研究の目的、立場、意義、そして構成が述べてある。「中臣祓」を通路として、寺院儀礼を神道史学の立場から研究するとし、その理由・目的、そこに見られる課題を指摘し、本論文の研究手法と各章節に関わる「中臣祓」の展開を示してある。

現在の神道史研究では、寺院儀礼の中の神祇についての研究が積極的に行われてこなかった事実を指摘し、今後は寺院をはじめ、人と神祇の多様な交流の場としての儀礼の変遷に注目し、それを神道史の中に位置付けてゆくことの重要性が述べられている。

第一章では、中臣祓の研究史を整理している。その第一節では、大正から現在までの中臣祓の研究史を年代順に整理し、そこに見られる問題点を指摘している。中臣祓研究は、昭和十年代に、宮地直一・河野省三・山本信哉・西田長男・萩原龍夫らにより基礎的研究がなされ、昭和五十年代に入ると、岡田莊司は従来の研究を整理して、現在の中臣祓研究の基礎を築いたが、中臣祓の伝播や儀礼面の研究は十分ではないことを指摘している。

第二節では、『大祓詞註釈大成』の底本と宮地直一コレクションとの関わりを考察している。そこでの底本に用いられた諸本が、少なからず、現在、國學院大學の宮地直一コレクションの中に見られることを明らかにした後で、それ

らの主なもの、例えば清世本・雅業王伝授本・平仮名本・仮名付本などについて解説してある。

第二章は、東大寺修二会における中臣祓及び神祇、注連縄などを考察している。第一節では、まずは東大寺の修二会を概観し、そこに見られる神祇に関する儀礼を指摘している。例えば、鎮守社での儀礼や神名帳奉唱において神祇が姿を見せること、これは寺院儀礼であるけれども、神祇信仰の一形態でもあり、神道史研究の一端であると主張している。

また、注連縄には修二会に関与する人々が穢れを忌み、心身を清浄に保つという重要な意味があること、それを現行儀礼を中心に考察し、多くの注連縄が聖なる空間を示しており、魔を退けるために用いられ、それらは堂童子によって差配されることを確認している。

つぎに「大中臣祓」「中臣祓」のほかにも、本行中に穢れが発生したと判断されると、咒師及び堂童子によって臨時の祓が行われたことも考察している。

ここでは堂童子が注連縄と祓の両方に関与すること、その役割が聖と俗の境界にあることから、清めに関わる役割を果たしたと解釈できるとし、これらは修二会においては中核をなすものではないが、法会を支障なく執行するためには不可欠の儀礼であることを明らかにしている。

第二節では、東大寺修二会の開白に先だって行われる「大中臣祓」について考察している。「大中臣祓」では中臣祓で祓が行われ、その所作は除魔・結界の儀礼（方堅）と解釈されると述べ、ここで方堅が行われるのは、「大中臣祓」が行われる場が二月堂と外部を結ぶ接点であること、法会の開始に先立って会場を清浄にし、穢れや魔が入り込まないように結界する必要があったと考察している。そして、これを咒師が行う理由を、咒師は魔を払い、会場を結界することにより、法会を無事に成就させる役割を担っていたからだと言っている。

次に「大中臣祓」の次第や詞章を分析し、そこに密教・陰陽道の影響がみられること、さらに土公供や「大中臣祓」を典拠としていることが想定されると

述べ、このように修二会が諸儀礼の要素を取り込みながら独自の形を成してゆく性格が見られることを指摘している。

第三節では、修二会に参籠する練行衆が、日々、自身に対する祓として用いる「中臣祓」について考察している。その「中臣祓」の次第は、「八幡大菩薩御詠歌」「拍手祓大事」「(略祓)」「神道秘訣祓」より構成され、このうち「拍手祓大事」は真言神道や修験道で用いられた「拍手祓大事」「伊勢拍手祓」であること、「(略祓)」には陰陽道の、そして「神道秘訣祓」には吉田神道の影響が認められることを考察している。

このように「中臣祓」の次第・詞章が、複数の系統の祓に関わる次第を集めて独自の形式を作り上げている事を明らかにしており、また、「拍手祓大事」には、真言神道で伝授された印信の次第が確認できること、これが現在でも実用されていることを指摘している。

第三章は第二章を補説するものであり、そこには東大寺堂衆と真言神道との

関わりが問題にされている。第一節では、堂衆の活動を把握するために、十六世紀を中心に活躍した東大寺法華堂衆・蓮乗院寅清の諸活動を分析してある。

寅清は、密教・修験道・大仏勸進等に関わり、さらに神道とも関係したことが、例えば、真言密教に関わり、「八十通印信」などの神祇書を入手し、また東大寺八幡宮ほかの遷宮儀礼にも関与していたことを指摘している。これらの神祇書は東大寺堂衆の間で相伝されているものもあるが、寺外より様々なネットワークを通じて持ち込まれたこと、また、東大寺法華堂において神道灌頂が行われていたことも考察している。

十六世紀の東大寺堂衆が、真言神道関係のテキストを所持し、それを実修していたことは、東大寺堂衆に真言神道が受容されていた事を示すものであり、さらに真言神道と東大寺修二会とのただならぬ関係を示すものと述べている。

第二節では、東大寺堂衆が受容した神祇書が、一方では、人的ネットワークによって智積院にもたらされ、新義真言宗の知のネットワークを通じて高幡山

金剛寺などに流伝し、もう一方では、随心院復興に伴う蔵書拡充の一環としてもたらされたと思われる神祇書が、同院より東寺長福寺を経て流伝してゆくことを確認している。つまり東大寺法華堂衆が中世後期に受容した神祇書の一部は、近世には真言宗のネットワークを介して書写され、各地に流伝したことを明らかにしている。

第四章では、視点を春日社に移して、祭礼などの先頭を行くスハエと神祇言説との関わりについて、『中臣祓』（春日社家大東家本）「白杖之事」を通路として考察している。

行列の先頭を行くスハエは、社参の行列・神輿・御神体等が通る道を祓い清める意味があり、また『中臣祓』「白杖之事」において、白杖の由来を、春日社の祭神であり、祓に関わる天児屋根命と関わらせて語ることで、それが「春日社で用いられる由来」や「祓の呪術的能力」を裏付けていると述べ、その背景には十六〜十七世紀に春日社で受容された様々な神祇思想・言説があったこ

とを指摘し、その背景には、清浄尊重の思想を窺うことができると述べている。

終章では、本論全体を総括し、神名帳研究・寺院儀礼における神祇と神道思想の関連の重要性などを述べ、今後の課題を示している。寺院や仏教儀礼で中臣祓を用いたのは、清浄をもたらす詞であったからで、この清浄であること、清浄をもたらすことが、儀礼のうちで重要な要素と考えられていたことを指摘している。そして大祓詞から中臣祓へと変化することで、中臣祓は多様な本文・解釈をもつに至り、陰陽師や僧侶もこれを用いるようになったと述べている。これは日本の諸宗教に共通することとして、清浄であること、清浄をもたらすことが重要とされたからであり、そのために寺院儀礼の中に、真言神道・陰陽道・吉田神道で用いられていた祓作法、方堅など様々な作法などが受容され、祭具にも新たな意味づけを行うなどして、法会・儀礼を円滑に進めようとしたのであると述べている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、寺院における儀礼のなかで、中臣祓がどのように受容されたか、そのあり方や特質を神道史学の立場から論じたものである。研究対象は「お水取り」の通称で知られる奈良東大寺修二会を主としており、そこでの「大中臣祓」「中臣祓」の章句や諸作法に注目して、精緻な分析・検討を行っている。研究方法は至って実証的である。つまり実際に現地へ何度も訪れ、研究対象を直接観察し、関係者からの聞き取り調査を繰り返すという方法であり、その成果は信憑性の高い内容となっている。

寺院儀礼に見られる神祇の位置は、神仏習合史で甚だ重要であるものの、それについての研究は、必ずしも積極的に行われておらず、その点からして、本論文には新しい研究分野を切り開こうとする意欲が見られ、高く評価される。

古代に起源をもつ東大寺修二会については、すでに芸能史の立場から現行の

諸行事を記録・分析した膨大な調査研究がある。本論文は、それらの成果を参照しながらも、副題に示すように「神道史学的研究」により、特に中臣祓に関わる作法の形成過程を考察することを通して、寺院儀礼に見られる新たな一面を照射しており、これまで知られてこなかった特質を明らかにすることに成功している。

その意味からしても、本論文は、東大寺という一寺院の一儀礼についての特質を解明したにとどまるものでなく、稲作を主たる生業としてきたわが国の村落において、外来の宗教である仏教をいかに受容し、定着させてきたかという、日本及び日本人の生活と不可分の精神文化の特質を研究する上でも、参照すべき成果となることが予想される内容を含んでいる。

さらに本論文に即して高く評価し得る成果をいくつか掲げると、まず第二章・第三節「東大寺修二会『中臣祓』の構成と典拠」では、修二会で練行衆が行う「中臣祓」の次第や詞章は、複数の宗派の祓に関わる次第や章句を集めて独自

のものを形成してきたと述べていることである。これは寺院のなかでの神祇的作法の形成が、すでに出来上がっていたものをそのまま受容したのではなく、周辺に諸宗教と交流しながら形成されていったことを示唆した論考として注目される。

次に、第三章・第一節「蓮乗院寅清の諸活動―東大寺修二会『中臣祓』研究の一助として―」では、中世末期に「神道灌頂作法」の伝授を受けていた東大寺堂衆に属する僧侶の寅清の活動を検討していることである。寅清は東大寺修二会にも奉仕し、行中の戒を練行衆に授ける和上を勤仕しているが、修二会以外にも、例えば、東大寺八幡宮の遷宮における荒神供、諸社の遷宮の沙汰など、神祇の儀礼に関わる活動を行っていたこと、さらには当山派修験の修験者を先達として大峰入峰を行ったこと、富士山登拝をしたことなどを明らかにしている。この究明は古代寺院の中世・近世における継続と展開の実態をうかがわせる貴重な内容を含んでいるのみならず、神祇に関わる諸作法を少なからず受容

した東大寺修二会の儀礼形成を遡源的に推測する上で、多くの示唆を与える意義深い成果である。

また、第四章「春日社における祭具と神祇言説―『中臣祓』(春日社家大東家本)「白杖之事」を通路として―」は、春日・興福寺の諸行事の行列の先頭を行く「白杖」の考察で、現在に伝承される諸事例と、歴史資料に基づいて、本祭具に関わる諸作法や言説を検討し、それが祓え・清めの呪具として成立し、機能してきたことを明らかにしている。なかでも、『江家次第』に賀茂詣の行列に白杖役が見られること、また円宗寺最勝会に探題役の行列を堂童子の奉仕する白杖役が先導しているとの指摘は、国家的な仏教儀礼において、その遂行を神祇に祈願・報告するだけでなく、儀礼を構成する一部として神祇的な作法が、すでに平安中期に形成されていたことを示すものとして注目される。

しかしながら、本論文には、いくつかの疑問や要望したい点も存する。例えば、第二章第一節では、東大寺修二会についての先行研究が整理されているが、そ

ここには仏教民俗学の成果の言及が見られない。今後、仏教民俗学による成果を研究史の中に位置づけることが望まれる。また第二章第二節で、東大寺修二会の咒師による「大中臣祓」作法を検討するなかで、中世中期以降の伊勢猿楽の資料を使用しているが、これは古代の散楽の系譜にある咒師座とするのが、現在の通説である。次に修二会の咒師作法に奉仕するのは正統の密教を修した僧侶である。さらに伊勢猿楽の資料として使われている『諸社造（遷）宮方堅夜神事執行之次第』は、そのタイトルの通り、宮の造営に関わるものである。ちなみに遷宮における方堅では、人形を瑞垣の外に運び出して焼き捨てるといった、修二会の「大中臣祓」には見られない、特徴的な作法が行われる。今後、散楽系の咒師と比較すること、遷宮関係の資料を使うことについて、修二会儀礼との関連性や、修二会における僧侶による咒師作法を検討する上での有効性について、検討・説明されることが必要であろう。

第四章では、春日社における中世神道や吉田神道の流入についても述べられ

ているが、挙げられている事例は、いずれも禰宜（神人）階級が関わったものである。春日社の祭祀は中臣神主家が主導するもので、神人はこれを補佐することを主たる勤めとしていたのであるが、春日社の年中行事・国家的な祭祀の中核にあった中臣神主も、中世神道や吉田神道の流入に積極的にかかわったのか、あるいはいかなる立場にあったのか、などについても論究してほしかった。

本論文は、奈良東大寺の修二会を通して、寺院儀礼のなかに神祇信仰に基づく儀礼、あるいは神祇信仰を反映した儀礼が少なからず存在していることを明らかにしている。それらの儀礼の歴史や所作を詳細に調査研究することにより、わが国における精神文化の、これまで知られてこなかった重要な一面を照射したものと、大きな評価を与えることができる。よって本論文の提出者大東敬明は、博士（神道学）の学位を授与せられる資格があると認められる。

平成二十二年二月十八日

主查 國學院大學教授 三橋 健 ①

副查 國學院大學教授 岡田 莊司 ①

副查 歷史民俗博物館准教授 松尾 恒一 ①